
● 北 陸

響 敏 也

【芸術の大量消費時代は来たのか】

芸術と呼ばれる創造活動は、ほとんどの場合、大多数の支持を得ることがない。

2017年の北陸音楽界について書くなら、まず「芸術と社会」の接触面について考えておかねばならない。どこでも良い、任意の交差点で道ゆく人を捉まえ、「ベートーヴェン知ってますか？」と訊けば、まず99%の確率で「ええ、知ってます」と答えるに相違ない。そこで次の質問、「ではベートーヴェンの作品、交響曲でもソナタでも協奏曲でも、何か1つを全曲、通してお聴きになったことは？」という質問に入ると、こんどは「はい、ある」と答える人が10%にも遥かに達しないことになる。これが芸術と社会の有りようの一典型だ。「なんだか知らないが、ありがたい高尚なものとして記憶している。けれど趣味として聴くことはない」の声は、「芸術と社会の接触面」で聞こえる声の一例で、大多数の人は芸術…クラシック音楽を含む「芸術」に関して、こういう接触を経て、長いご無沙汰へと続く。

芸術家の活動を、もし地域や国や世界中の人々の大多数が支持するような事態になったら、要注意だろう。作品と活動を見直すべきときに来ているかもしれないから。たぶん、それはもう芸術活動ではなく、営業もしくは事業と呼ぶに相応しい活動内容に変化してきているに違いないから。

2017年春の北陸音楽界の出来事…と言うより結果的には、やがて日本全国の話題、課題としても捉えられる「変化」について、記憶と記録をたどろう。

フランスの古都ナントでルネ・マルタンが構想、創始した音楽祭「ラ・フォル・ジュルネ (LFJ)」は、クラシックより、むしろロックやジャズに浸る青春時代を過ごした彼が、ロックやジャズの催し物のような大勢の人々が感動を共有する場をクラシック音楽で創れないか、という発想で始まる。狙いは見事の中で、氷点下の極寒の街角に並んで開演を待つ人々の列が奇蹟のように続く。「町起こし」もヨーロッパではクラシック音楽なのだ、と強い印象を残した新たなクラシック音楽祭は2005年、東京でも開催される。発祥地より大規模な100万人規模の集客を誇る催しとなるが、当初のルネ・マルタンの構想を、むしろ直通で実現した形ともいえるだろう。LFJの基本姿勢「クラシック音楽を町ぐるみ身近で気さくに楽しめる」を現実のものとした。

【わが町らしさを国際派音楽祭に】

そうして2008年から金沢が新たにLFJに参加する。このときから金沢は、常に「金沢らしさ」を意識した提案を繰り返し、ルネ・マルタンとは微調整が必要だったという。金沢の場合、たんに金沢での開催というより周辺地域、あるいは北陸全域をカバーする構想を持ち、さらには全域からアマチュアをオーディションして、各回のテーマに沿った連弾演奏シリーズ（ベートーヴェンやモーツァルトのソナタ等）を組み、吹奏楽や合唱の名門団体（学校・一般）を招き、名物となった能とクラシック音楽が同じ舞台に乗る企画など、手作り感と独自性を前面に出してきた。

ひるがえってLFJの本流は、同じ顔ぶれの第一級の演奏家が、ほぼ同時期に同じテーマの音楽祭を開いている各都市を巡ってゆくという、演奏の高度な質の維持と、コストの低減化を両立した、優れて頭の冴えた仕組みで淀みなく流れている。そこへ金沢式の迂回路やジグザグ路などが乱入するのは避けたかった。両者一步も譲らず、しかも紳士的に議を尽くし、金沢は2017年のLFJから不参加と表明。新たに独自の音楽祭『いしかわ 金沢 風と緑の楽都音楽祭』（愛称《ガルガンちゃん音楽祭》）を開催する旨を発表する。

期待と不安と思わくの交錯するなか開催された第1回は、前年のLFJを上回る集客力と、音楽祭の新たな方向性を鮮やかに示したようだ。これを執筆している現在、日本のLFJ開催地だった新潟、鳥栖、びわ湖が、金沢のあとを受け、雪崩を打ったようにLFJを抜け、日本でのLFJ開催は東京でのみとなった。

クラシック音楽が大多数の楽しみと成り得るか、音楽祭がファストフードのように気さくで便利な音の食べ物に成り得るか。それとも手作り感覚こそが現代に活かせるのか、解答は簡単に出ない。注視して聴き続けよう。